

ともあれ、 私は存在する

山本太郎

やまもと たらう 医学博士、長崎大学熱帯医学研究所教授

山を一人歩き始めたのは、二〇一

一年初秋のことだった。

二〇一〇年一月にハイチで地震が起きた。三〇万人の命が失われた。私は二〇〇三年から四年にかけて、ハイチに一年間滞在して、エイズ研究を行っていたが、最後は、クーデターに押されるようにハイチを後にした。それから六年後のことだった。地震の二日後、日本を出発し、五日後から震災後の医療支援を開始した。かつて暮らしていたアパートは全壊し、アパートの前には十数本のローソクが夕闇に揺らいでいた。アパートで亡くなった人の数だと現場の人が教えてくれた。夜、空を見上げた。停電で光を無くした街から見る空には、星が満ちていた。

翌二〇一一年三月には、東日本で地震が起きた。出張中の東京で地震にあった私は、長崎に帰ることなく東北に向かった。地震の後の津波が襲った三陸海岸の街は、跡形もなく

破壊されていた。引き続く余震は大地の咆哮のようにも聴こえた。明日が来ることさえ信じられないようななかで、ふと見上げた夜空には、しかし満天の星が輝いていた。それは今まで見たどの星空より綺麗だった。破壊され尽くした地上との対比。その事実に見えるような戦慄を覚えた。東北での医療支援はそれから一カ月に及んだ。

山を一人歩くようになったのは、それから半年が過ぎた頃だった。あの星空をもう一度見たいと思ったのが理由だと今となつては、その理由がわかる。一時期は憑かれたように山を歩いた。そうしないと、どこか自分の精神が壊れそうだった。そしてそんな時には、一冊の本を抱えて山に入った。夜はテントのなかで本を読んだ。静寂があたりを占めるなかで時間は無限ともいえるほどであった。そんな本の一冊に、クロード・

レヴィ・ストロースの著書『悲しき熱帯』があった。クロード・レヴィ・ストロースは、フランスの社会人類学者で、構造主義の創始者とされている。一九六〇年代から八〇年代にかけての思想界で活躍した人物である。本の終わりに近いところで「世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう」という言葉に出会った。自然の脅威の前に身を竦めた一人の人間として、その言葉が心に沁みた。

二〇二〇年、新型コロナウイルス感染症のパンデミックに世界は震撼した。非常事態が宣言された。そんななかで『悲しき熱帯』を再読した。自粛生活のなかで久しぶりに自分の時間がもてたからだ。そしてもう一度あの言葉に出会いたいと思ったからだ。

あった——。人類学者らしく人類学者らしくないその言葉が。

「世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう」

一方で、その時まで心に留めなかった言葉もあった。クロード・レヴィ・ストロースは、そのうえで「ともあれ、私は存在する」と書いていた。そう、私は存在するし、私たちの世界も、こんなことでは決して消えないと、その時思った。二〇二〇年の秋のことだった。また、山を歩きたいと思った。

